

新制	出席者名	欠席者名
9	高橋 宏 佐々木 隆 田中総利 金沢 稔 斎藤三千雄 斎藤秀夫 若松正雄 工藤 豊 檜森 寛 栗原優子	加賀義介 宮腰香児 江川瑞宏 山口富秋 七戸節雄 石岡忠治 妹尾悦子 逸見政一 山崎瑞穂 平川正広 芳垣恵美子
10	穴山勝良 三浦義輝 新川高信 須田正己 古内 迎	金田得男 坂本良隆 鈴木 昇 中村敦美 柴田 武 佐藤昭吉(63. 4. 5 死去)
11	宮腰瑞夫 港記久郎 佐藤重秋 田中善明 笹木広澄 小野 忠 松岡興紀 宮腰興紀 清水武久 石川正順 赤塚鉄男 島田雄右 太田勝治 畠 辰宏 鈴木元紀 下間弘道 蓼沼正紀	加藤泰祐 佐藤晃一 佐藤清弘 佐藤芙美恵 竹内孝男 落合清郎 浪岡邦義 山崎 武 大越善蔵 金谷義昭
12	小島セイ 納谷祐治 武田 茂 山田圭一 野中啓右	熊谷洋一 佐藤 亘 山本義馬 平沢正三郎 石田邦明 田中昌孝 茂内和雄
13	宮腰謙吉 高松和夫 柴田光夫	加賀宗彦 城野攻一 須藤靖夫 畠 和彦 北村幸雄 工藤芳正 大倉報三 檜森 隆 小林武広
14	宮腰克也 近藤信竹 高田政勝 山本 敏 小高 功 加藤 昭 菅 紀夫 磯部 博 浜屋裕一 高谷 誠 森 喬夫 村上満喜子	袴田宏義 佐々木孝 小沢孝一 大沢忠夫 平川六蔵 山田孝行 越前屋明則 田中正敏
15	桜田真人 播磨谷謙哉 島山 隆 武田 功 矢木信章 小林勝彦 清野勝子	越後谷達雄 工藤正久 太田謙一 桧森忠義 戸松勇一 渡辺誠子 野呂田義晴
16	大槻綱司	杉沢忠信 石川信宏 金谷輝久 梅田俊雄 平澤正典 平澤徳子 岩城静夫
17	加賀亮司 干場革治 佐々木正男 渡辺節朗	横田真理子 内野裕子 石山 真 高松睦雄
18	浅野友城 大野 操 本庄 真 北島英彦 坂田光男	逸見敏子 荒川圭一 佐藤修一 山本 修 藤田辰夫 小林公雄 田村規清 越後武彦
19	井上道晴 加茂谷純一 今野広隆 橋本 悟 笹村八州 新堀益夫 若狭秀己 高松正行 辻 敏 小野津世子 高橋ヒサ子 千葉礼子 平塚たづ子	越後義明 佐藤 了 浅野 譲 大高喜三男 長谷川 基 大塚司郎
20	平川隆康 鈴木貞幸	伊藤陽一 菊池正己 佐藤 博 鎌田明男 鈴木健次 田村 豊 森岡俊明 佐々木慶二 坂田二郎 金谷美津雄 川村 孝 畠山政隆
21	金野峻明 佐藤 司 菅原 涉	後藤幸一 工藤長昭 山谷隆則 大高正典 鈴木憲道 直嶋博明
22		加賀谷良博 宮腰修一 柴田正信 武田清悦 佐々木 博 佐藤 修 増田春樹 増田幸子 熊沢朝子
23	小河範也	安部義三 加賀久毅 加藤秋夫 高畑 仁 藤田久夫 松尾田鶴子 鈴木幸男 田口勝正
24		菊池雄三 工藤俊一 工藤長彦 山本良寿
25	小林 彰 須藤正喜 高橋敦子	大山 等 斎藤友江 広瀬久美子
26	庄内俊憲	宮腰和憲 袴田雅之 山崎友久 桜田 勇 佐保田朋子 菊地勇作 木村栄次 針金三弥
27	佐藤 晃	松田和彦
28	佐々木正人 浦島浩文	泉 富士男 金田 優 高井一男 吉田真由美
29	幸坂金良 山谷勝也	佐藤 豊
30		柳谷浩二
31	長谷川 徹 鈴木裕美子	石川雄二 三国 正
33		信太 誠
36	若狭 恵	
	新制出席 146名	新制欠席 234名
	旧新出席合計 179名(女子16名)	旧新欠席合計 321名
	同伴家族9名、招待者15名	
	出席者合計 203名	出席欠席連絡者合計 500名

〔御招待出席者 15名〕

(恩 師 先生) 高橋直三先生、柴田重行先生

(市 役 所) 金田広実助役、三田元悦市教育長、塚本佐市総務課長、大山吉昌東京駐在

(学校同窓会) 神馬恒成会長、加賀正隆校長、野中和郎教頭、佐藤 隆先生 (講 師) 山田久志氏

(能代工業東頼会) 宮腰昇三、鈴木博之 (能代北校松陰会) 吉田敬子、谷内葉子

能代高校近況

月明り浴びゴールめざす 伝統の10里強歩



能代高校の伝統行事・10里強歩が今年9月18日未明、同校を発着点に865人の生徒が参加して行われた。月明りの中、体力の限界に挑み黙々と走る生徒、仲間同士で話をしながら歩く生徒とさまざまだったが、814人が完走（歩）し、能高健児の意気を示した。

強歩大会は、生徒の強健な身体、精神力を養おうと昭和13年に始まった恒例行事。戦中・戦後の19～26年まで中断し、その後42～43年にも見送られたが、生徒の強い要望もあって現在に続いている。

今年は10里強歩の名のとおり、「距離を10里に！」と、コースは昨年より約4キロ長く、男子は40.6Km、女子は23.2Kmとなった。今年は冷え込みがきびしく、例年になく足のケイレンや腹痛を起こす生徒が多かったが、それでも沿線住民の温かな声援に励まされながらゴールをめざした。

学力向上へ試行錯誤

65分授業、徐々に定着

国公立大学の入試制度は、共通一次試験が今年から新テストに代わり、二次試験も分離分割方式の導入がさらに拡大するなど目まぐるしく変化し、受験生にとっては見通しの立てがたい情勢となっている。加えて秋田県では首都圏などと比較して受験態勢の遅れが指摘され、能代高校でも毎年多くの浪人生を出す結果となっている。

このため、本校では授業本位の学習の基礎に立ち戻り、今後さらにきびしくなる受験に対応していこうと、本年度から授業の見直しに踏み切った。

1時限の授業時間を50分から65分に変更、平日6時限の時間割は5時限とした。また、授業コマ数の不足に対応するため、2週間を1サイクルとし、1週目と2週目の時間割を一部変更して調整している。

このほか、テストは中間、学期末の計年5回から4回とした。

65分授業、導入後、まだ試行錯誤の段階であり、結論が出るまでに短くて1年、もしくは今の1年生が卒業する3年後とみている。

平成元年11月28日、熊谷忠一先生が東京の同愛記念病院で逝去なされ、12月3日、能代で葬儀が行われました。

熊谷先生は能代高校の同窓でもあり、母校で教鞭をとっておりましたが、昭和47年から52年まで教頭として務めておられました。

ここに東京同窓会会員一同、謹んで心よりお悔やみ申し上げます。

生徒側からは、授業時間延長による学習範囲の広がりを感じ、「長くて苦痛だ」の声も当初聞かれたが、大方は「最初は戸惑いもあったが、今は慣れた」と受け止めている。一方教師側からは、「うっかりすると授業進行が遅れる」という意見もあり、これまで以上に工夫が必要と思える。

加賀校長は「学力向上に特効薬はないが、65分授業は、学ぶ姿勢を培うことにつながればよいと思う。いまの段階では効果や支障は目に見えないものの、生徒は順応しているようだ」と語っている。